

「平和の鐘を鳴らそう2019」

平和についてメッセージ集

Peace for Tomorrow

広げよう寛容な平和の心

2019年8月15日

広島ユネスコ協会編

平和についてメッセージ集 目次

(ページ)

- ご挨拶
広島ユネスコ協会会長 松岡 盛人
- 1 Make Peace With Nature
タイからの広島市研修生 シリマス・シッチチョック . . . 1
- 2 あの日を伝える
広島大学付属高等学校 大段 利々子 . . . 2
(上記英語訳) To Report That Day . . . 3
- 3 Let Us Work Together To Realize A World Without Nuclear Weapons
広島大学付属高等学校 高校生平和大使 松田 小春 . . . 4
(上記日本語訳) 核兵器のない世界を実現するため行動しましょう 5
- 4 平和について対話とつながること
高校生平和大使 広島県立広島高等学校 北畑 希実 . . . 6
(上記英語訳) The First Step For Peace To Communicate With
Various People . . . 7
- 5 終戦74周年と平和の鐘
韓国ユネスコ大邱協会会長 南 相杰 . . . 8
(上記英語訳) The Memorial Day Of The 74th End Of World War II
and The Peace Bell . . . 9
- 6 平和の鐘を鳴らそう
広島ユネスコ協会平和・世界遺産部会長 内田 一士 . . . 10

・英語訳 山本 朝世 広島ユネスコ協会国際部副部会長

「平和の鐘を鳴らそう2019」ご挨拶

本日、74年目の終戦の日を迎えました。令和元年初、今回で20回目となるこの「平和の鐘を鳴らそう！」の集いは、8月を中心に全国各地のユネスコ協会が開催しています。

私たちは、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ憲章の理念のもと、「ヒロシマの心」を大切にしつつ、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向けて草の根活動に取り組んでいます。

しかし、現在、世界秩序が激変する中、いまだに地域紛争が絶えず、戦争の危機をはらむ様々な事象が存在しています。更に、各国の努力で果たして核兵器の廃絶へと向かっているのでしょうか。

今や、戦争を知らない戦後世代が8割を超えています。私たちは、過去の悲惨な出来事をしっかりと胸に刻み、過ちを二度と繰り返すことのないよう、平和へのたゆまぬ努力を重ねていかなければなりません。

核のない平和な世界の実現は、人類共通の願いです。唯一の戦争被爆国である日本としても、核兵器禁止条約へ躊躇なく早期に批准するよう切に望みます。

この暑さの中、タイからの広島市研修生や中・高生の皆さまにもご参加、ご協力をいただき、本当にありがとうございます。

原爆・戦争犠牲者の方々を慰霊するとともに、戦争や核兵器のない平和な世界の実現を目指し、一人ひとりが思いを込めて平和の鐘を鳴らしましょう！

2019年（令和元年）8月15日

広島ユネスコ協会 会長 松岡 盛人

Make Peace With Nature

What to blame for the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki, which claimed hundreds of thousands of lives, is ignorance. We, human beings, ignore the fact that other people have lives, families, and people they care for.

Talking another's life is against the laws of karma. It disturbs the system; creates suffering and chaos. No one deserves to die. Stripping someone of their life is the ultimate sin. I am in no position to talk about the suffering the *hibakusya* endure. However, I am sure that they have the right to say they witnessed the bottom of human history.

74 years after the atomic bombings, in 2019, we are on the verge of once again hitting the bottom of history. This time it is not war fought between nations but war against nature. Again, ignorance is to blame. We human beings, ignore the fact that there is a cost to pay for our comfortable lives. We may have money to buy a new phone, but how much money can buy air to breathe ?

We used to be able to drink the rain and the snow. Now, they have turned yellow and acidic. The forests and the oceans, the fresh-free markets of the world, are dying. This is the cost of our comfortable lifestyles.

There is not much left. First, we paid for our food. Now we pay for our drinking water. Next, we are going to have to pay for a can of oxygen so we can breathe. We cannot win this war. The only thing we can do is to make peace and surrender. Stop using single use plastics. Reduce you carbon footprint. Plant more trees. Clean the oceans. Grow your own food. In this war, no one can escape. Everyone must act together in order to survive. Make peace with nature. This is our last chance before we hit the bottom of human history, again.

Sirimas Sittichok

あの日を伝える

あの日を伝える

これは先日、私が松井広島市長を表敬訪問していただいたお言葉です。この言葉を胸に、私はこの夏、高校生外交官として渡米しました。

日本各県の高校生 40 名と全米からの高校生 40 名を前に、広島県代表として平和のスピーチを行いました。当時の戦渦の様子、被爆した方の思い、私たちの願いを伝えました。見ると、彼らは真剣なまなざしで私を見つめ、そしてその目には、涙がたまっていました。その目から、それぞれの平和への強い思いを感じ取りました。

私たちは、第二次世界大戦の情勢やなぜ戦争が起きたかを知識としては知っています。しかし、その実情を正確に計り知ることは、簡単ではありません。

原爆資料館を訪れたとき、私は涙が止まりませんでした。

1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、晴天のもと自宅の庭で、三輪車で遊んでいた 3 歳の男の子は、ひどい火傷を負い、亡くなりました。

お母さんが自ら収穫した作物で作ってくれたお弁当を食べることを楽しみに仕事場へ出かけた息子は、二度と家に戻ることはありませんでした。お母さんの元に届いたのは、丸焦げになったお弁当箱でした。

おなかの中にいた赤ちゃんは生まれながらにして病を抱えることとなりました。

一人一人の人生が、幸せが、未来が一瞬にして崩れ落ちて行きました。一発の原子爆弾が全ての人の運命を変えました。

けれども、当時のヒロシマの人たちは、その日生きるために過ごした、もう 1 日生き抜くためにみんなで力を合わせて頑張った。その一人一人の努力とその成果の積み重ねが、今の広島の復興につながっていると思います。戦後 70 年間草木は生えないと言われた広島は、このように緑豊かで世界に誇れる都市にまで復興を遂げたのです。

社会というものは、そのような 1 人 1 人の生きる力の結集によって成り立つものだと思います。だから広島が復興した過程と努力を、世界中に伝えることによって、決して過去の過ちを繰り返してはいけないという思いにつながると思います。

「あの日を伝える」これは、広島で生まれ育った私たちの使命です。悲惨な出来事を決して忘れてはいけません。使命を果たす為には何が出来るか、平和の鐘を鳴らす、これはその第一歩だと思います。

戦争のない、豊かで明るい世界が永遠に続くこと、私はこれを願い平和の鐘を鳴らします。そして、その鐘の音が世界中に響くことを願っています。

広島大学付属高等学校 大段 利々子

(英語訳)

To Report That Day

“To report that day.” This is the word that Mayor Matsui of the City of Hiroshima gave me when I paid a courtesy visit.

I visited the States as a high school peace messenger this summer thinking of this word, and I made a speech about war devastation, A-bomb survivors’ experiences and our wish in front of 40 Japanese high school students from all over Japan and 40 high school students from all over the States as an ambassador of Hiroshima. When I saw them, they were looking at me earnestly and I could see them with tears in their eyes. I felt their strong wish for peace.

Though we know the knowledge of the World War II circumstances and why it happened, it is not easy to know the actual circumstances.

When I visited the Peace Memorial Museum, I couldn’t help crying. At 8:15 on August 6th of 1945, the boy who was playing a tricycle in his yard, had a heavy burn and passed away. The son who was looking forward to eating mother-made lunch and went to work, never went back home. His mother received his burned lunch box. The baby who was in his mother’s womb, had a disease by born.

Each life, happiness, and futures were broken in one moment. Only one A-bomb has changed everyone’s life, however, people those days survived each day, and worked together to revive Hiroshima. Everyone’s effort is connected to a present revival of Hiroshima. Although Hiroshima was told that any plants and trees would not grow up for these 70 years, it made revival to be a green and proud city in the world.

I think that society consists of such each person’s effort. Conveying the process and efforts to have made Hiroshima revive, will connect the thought never to repeat the evil.

“To report that day” is our mission that we were born in Hiroshima and grown up in Hiroshima. We must not forget such a miserable tragedy.

“To toll the Peace Bell” is the first step, hoping eternal peace all over the world. I will toll Peace Bell to wish warless, rich, and light world continued forever, and I hope that the sound will reach all over the world.

Ririko ODAN

High School attached to Hiroshima University and the 22nd High School student ambassador

Let Us Work Together To Realize A World Without Nuclear Weapons

I am Koharu Matsuda. I'm a high school student of Hiroshima University High School and the 22nd peace messenger of Hiroshima.

An atomic bomb was dropped on Hiroshima and sent 140,000 people to cruel deaths. On that day in August 1945, men, women, elderly people, and children alike died under the mushroom cloud. Some were burned all over their bodies and others suffered from bleeding, vomiting, and diarrhea, but there was no way to rescue and cure them. Those who survived the attack have been suffering its aftereffects ever since. Many of them suffered even from social discrimination.

74 years have passed since then. The number of *hibakusha*, atomic-bomb survivors, is decreasing year by year. Appeals made by *hibakusha* over the last 74 years have helped to prevent the use of nuclear arms again. The time will come when all the *hibakusha* disappear and memories of the atomic bombings could fade away. In such a situation, I wonder how many people will raise their voices to stop the use of nuclear weapons.

No matter what opinion you have about nuclear weapons, listening to the words of *hibakusha* is your duty and your right. You need to know what weapon you are talking about and what weapon you are deciding how to use it. If you have the opportunity, please come to Hiroshima to learn about how terrible the destruction and suffering caused by the atomic bomb was. Remember Hiroshima. Choose our future by our own will and our own wish. There are no reason to quit trying. Let us work together to realize a world without nuclear weapons.

Koharu MATSUDA

High School attached to Hiroshima University and the 22nd High School student ambassador

核兵器のない世界を実現するため行動しましょう

私は松田小春です。私は広島大学付属高等学校の生徒であり、そして広島
の第22代高校生平和大使です。

広島に原子爆弾が投下され、14万人もの人々を痛ましく死なさせました。
1945年8月のその日に、男も、女も、年寄りも、子どももきのこ雲の下で
同じように死にました。全身にやけどを負った人もいれば、出血や嘔吐や下痢
に苦しむ人もいましたが、救うすべはありませんでした。

生き残った人たちもそれ以来、後遺症に苦しんでいたり、差別さえ受けた人
もいます。

あれから74年が過ぎ、被爆者―原爆生存者の数は年々減少しています。過
去74年、被爆者によるアピールによって、再び核兵器が使用されることは防
がれてきました。

現在、被爆者が減少し、原爆の記憶が消えようとしています。こういう状況
の中で、どれほどの人が核兵器使用を止める声を上げることができるでしょ
うか。

たとえあなたが核兵器についてどんな意見を持っていても、被爆者の言葉に
耳を傾けることが皆さんの義務であり、権利です。どんな兵器について話され
ているか、どんな兵器をどのように使用する決定をしているか、皆さんは知る
必要があります。

もしも機会があれば、どうぞ広島へお越しになり、原爆によって引き起こさ
れた破壊と苦しみがどれほど悲惨であったかを学んでください。広島を忘れな
いでください。

私たちの未来を、私たち自身の意思と願望により、選択していきましょう。
その努力をやめてはいけません。核兵器のない世界の実現を目指し、ともに行
動しましょう。

広島大学付属高等学校 第22代高校生平和大使 松田 小春

平和について対話とつながりあうこと

第22代高校生平和大使の広島県立広島高等学校の北畑希実です。

私は被爆3世です。私の祖父は5歳の時に被爆しました。その時一緒にいた祖父の祖母は庭で洗濯しているところ被害にあい、全身やけどを負い、意識を回復することなく一週間後に亡くなったそうです。爆心地近くで労働した祖父の兄も遺骨を見つけることなく、名前入の制服が見つかり、それが今は遺骨代わりとなっているそうです。祖父は、被爆当時の状況も地獄でしたが、家も無くなり、家族も欠けた祖父の家族は、その後の生活も苦しくて死を考えたと言います。

以前、紙芝居で空襲被害を伝えている方に話を伺った際、「戦争で子どもをなくした方の戦争は終わっていない」とおっしゃっていました。子どもを亡くした祖母の母も死ぬまで被爆当時のことを語らなかつたそうです。戦争は、多くの建物を壊し、人間を殺してきただけでなく、残った人のその後の生活までも破壊し、被爆者の心の傷は癒えることはありません。被爆者の方が今、思い出したくない被爆当時の話を語ってくれるのは、もう二度とあのような悲劇が起こってほしくないという強い思いがあるからです。

私は戦争を経験していません。空襲や原爆も経験していません。ですが、祖父の話からその当時の状況や気持ちを想像することはできます。私は、自分の家族や友達が同じような被害にあうことを想像するととても恐ろしいです。皆さんも同様なはずです。核や戦争からは憎しみや悲しみ、虚しさしか生み出しません。愚かな核を作ったのも人間ですが、想像力を持つのも人間です。私は想像力を持つことで、繋がりあっていくことで平和な世界、核の無い世界は実現すると信じています。そのために、私は被爆者の声に耳を傾け、自分の声で多くの人に伝えていき、想像するきっかけを与えていきたいと思います。

高校生平和大使の活動に高校生一万人署名活動という活動があります。高校生平和大使だけでなく、全国の高校生が有志で集まり、サポーターの大人の方々、署名してくださる多くの方々によって成り立っています。署名活動をしている中で、いろんな考え方をを持った人や平和のために活動をしている多くの人がいることを知りました。

私は、同じ考え方をを持った人だけでなく、違う考えを持った人とも積極的に平和について語り合う場をつくり、対話することが平和への一歩だと考えます。私は想像力を持つことで、つながりあっていくことで核の無い平和な世界は実現すると信じています。

第22代高校生平和大使 広島県立広島高等学校 北畑 希実

(英語訳)

The First Step For Peace To Communicate With Various People

I'm a A-bomb survivor III. My grandfather was A-bombed at the age of 5. My grandfather's grandmother was burned all over her body and died without consciousness one week later. My grandfather's brother, who was working near the hypo-center, couldn't be found. They found the school uniform with his name, so it became his remains.

My grandfather tells that Hiroshima looked like a scene from hell, he lost his house and family, lived badly, and wanted to die.

When I saw a picture-card show, the story teller told "The people who lost their children can't finish the war," War destroys not only many buildings and people, but also survivors' lives. The sufferings of war aren't recovered. A-bomb survivors tell the story about that day, because they have a strong thought never to happen such a tragedy.

Though I have no experiences of war, air attack, and A-bomb, I can imagine the circumstance of those days my grandfather's feeling. Nuclear weapons and war bring us only hatred, sorrow and hollow. It is mankind that made foolish nuclear weapons, and it is mankind that can work imagination. I believe that if we work imagination and cooperate, we can realize world peace and the world without nuclear weapons. I want to listen to victims of the atomic bomb, convey their messages and stimulate imagination.

As a high school student ambassador, we have a signature campaign to collect 10,000 signatures. Though the campaign, I became to know that there are people with various ideas and people working for peace. It is the first step for peace to communicate with various people.

I believe that if we work imagination and cooperate, we can realize the world without nuclear weapons.

Nozomi KITAHATA

Hiroshima Prefectural High School and the 22th High School student ambassador

終戦 74 周年と平和の鐘

国際連合（UN）の一つの機構である UNESCO（ユネスコ）は、平和実現の方策として、各国の教育と科学、そして文化の発展を助け、これと関連した国家間の相互交流を通じ、世界平和の実現の礎を築き上げました。この UNESCO は、加盟国の政府が参与して活動しただけではなく、その国民らも UNESCO 協会を構成して民間団体として UNESCO の理念である平和実現のため、自発的に活動しました。

特に、日本の政府と国民は終戦後、懇切な平和意識をもって平和実現のため、どの国よりも積極的に努力してきました。74 年間持続的に、政府だけでなく、地域別の UNESCO 協会の会員たちと各種民間団体と個人が、平和実現のため自発的に参加し、多様な活動をしてきました。このように持続的に平和実現のため活動してきた実績は、世界的にも模範的な事例だと言えます。

西暦 2019 年 8 月 15 日は終戦 74 周年に当たる日です。この日を迎え、私たちみんなは、新しい覚悟で平和の鐘を鳴らすべきであると思います。平和の鐘は人々の心の中の人類愛、理解、和解、協力、肯定などを呼び起こし、平和実現のため努力するようにさせます。

終戦 74 周年を記念しながら、日本と韓国が平和の鐘を大きく鳴らし、UNESCO の平和理念に立脚した積極的な交流と協力により、世界平和と国家発展を築き上げていくことを願います。

韓国 UNESCO 大邱協会会長 南 相杰（ナム サンゴル）

(英語訳)

The Memorial Day Of The 74th End Of World War II and The Peace Bell

UNESCO is one of the departments of the United Nations, and it has helped the development of each country's education, science and culture in the cause of realization for peace. Though exchanges among nations, it has built the foundation to realize world peace. The UNESCO has involved not only in the social work, but also in private groups to realize peace under the philosophy of UNESCO.

After World War II, especially Japanese government and people have endeavored to make a peaceful world for these 74 years, cooperating with UNESCO Association and private organizations. The achievement is the best model in the world.

Today, 15th August of 2019 is a memorial day of the end of World War II. We should toll the Peace Bell with an original intention. The Peace Bell reminds humans of love about understanding, reconciliation, cooperation, recognition and so on in our minds.

We hope that Japan and Korea will do positive exchanges and cooperate with the UNESCO philosophy and will build world peace and development among nations on the memorial day of the 74th end of World War II.

NAM Sangol

A president of Korea Tegue UNESCO Association

平和の鐘を鳴らそう

平和の鐘を鳴らそうは、原爆の悲惨な被害を経験し、復興した広島から平和の発進として、戦争や核兵器、貧困のない平和な世界を実現するため、2000年から開催しています。

日本が1941年に、ハワイ真珠湾の米軍艦隊に攻撃して戦争を始め、周辺のアジアの国々に軍隊が進出して現地の人々の権利を侵害しました。そして米軍飛行機が広島市と長崎市に原爆を投下し、女性や子どもなど武器を持たない多くの市民や建物などが悲惨で甚大な被害を受け、1945年8月15日に終戦して74年が経ちました。

現在の広島市と長崎市は、多くの人の尽力により復興していますが、原爆の後遺症によって苦しんでいる人が、今なおいます。

第二次世界大戦後まもなく、日本は軍隊を持たず、国際紛争を解決する手段として武力の行使はしないという平和憲法を制定し、74年間、戦争をしないで今日を迎えています。1951年に日本も平和を基調とするUNESCO（ユネスコ、国連教育・科学・文化機関）に加盟し、ユネスコ活動を行ってきました。

2017年7月に国際連合で、核兵器禁止条約を122カ国の賛成により採択しました。この条約は、50カ国以上が批准すると発効することになっています。国際連合で条約を採択して、各国が署名し、批准するという流れになります。2019年8月7日現在で71カ国が署名し、25カ国が批准している状況です。日本政府は、核兵器保有国と非保有国とが対立しないよう橋渡し役になると話し、この条約の署名と批准をしていません。

多様な立場にある各国や人々が、対話をしながら平和を構築する必要があります。戦争により唯一被爆した経験があり、被爆の悲惨な実相と核兵器の非人道性をよく知っている日本が、核兵器禁止条約を批准しない状況が続くのはよいことでしょうか。日本も外交努力などを継続し、核兵器禁止条約を批准するよう強く望みます。

高度な科学技術も平和に利用されなければなりません。

ユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と明記しています。このことを一人ひとりが自覚し、戦争が起こらないよう、戦争を起こさないよう、平和な日常の暮らしを守り続けましょう。これを達成するためには、異文化や個性の違いを理解しあえる寛容な心により取り組むことが大切です。

広島ユネスコ協会平和・世界遺産部会長 内田 一士